

# 西藏喇嘛教史

(第二回)

寺 本 婉 雅

## 第三章 西藏の闇黒時代

### 策一節 佛教の破壊

ランダルマ王の佛教破壊 叙上の如く、祖宗三王中ラルバチャン王出で、佛教を奨勵し、殊に聖法の根本たる毘那耶の方法を訂校嚴修し、敬虔に佛教を信仰して、尊重崇拜至らざるなかりき。然りと雖當時は愚昧の臣下尙多くボンボ教を崇拜し、教法の弘通に妨礙を加えしかば、王は、遂に是等の抵抗に堪へずして病を得て崩じぬ。王子ツァンマ (Gtsan-Ma) を始め、諸の沙門等は大壓抑を蒙りぬ。此時に於てランダルマ (Glan-Dar-Ma) なるもの王位に登りしより、佛教信者は益々迫害を蒙るに至り、王は佛教不信者の群臣と共に勅令を發し、翻譯家、班抵達等の聖典翻譯するを嚴禁するのみならず、尙彼等を放逐し、オジャンド殿堂に於て佛事禮拜する能はざらしめき。ランダルマ王の迫害は常に此に止まらず、王の佛教嫌惡の念益高まりては、即位後僅かに五六年を経るに、西藏

の喇嘛を悉く壓迫し、兵を率ひ、羯鼓を打ち、弓箭を放ちて悉く賢哲沙門を殺害し、一般佛教信者を殺戮蹂躪せり。

王は根本より教法を滅絶せんと志し、西藏佛教信仰の本尊の結品として崇拜せられつゝある釋迦の靈像を破壊せんとせしも、佛像の奈何なる由にや、動かす能はざるにより、坭土を以て佛像に塗抹し外より扉を閉ぢ、坭土を塗りて隱匿し、その扉上に佛陀が酒を飲める繪を畫きて嘲弄せり、實に王の暴逆無道は殆ど異端の迫害にも似て有頂天に達したり。

**ランドン王の闇殺** 此時に當りて、ハールン・バルヂ・ドルゼ (Lha-Tuñ dPal-Gyi Rdo-Rje) なる

一喇嘛あり、王の暴逆無道を視て憤慨忍ぶ能はず。密かに王を闇殺せんと謀り、そが機會を窺ひぬ。

一日王は拉薩首府の法輪殿、即ちチョツェンモ殿の庭前に立てる石碑の傍に來りて逍遙せるや、彼喇嘛は秘かに王の傍に近づき、機を窺ひ箭を放ちて王を射殺せり、而して彼は直ちに其場を逃れて、**グンベ・クントツ** (mNon-Pa Kun-bTuse) **ツェツァルン・オッダ** (hDul-Ba Hod-Ildan) **ツカルマ・シャタム** (Karma Ga-Tam) 等を伴ひ、倉惶として喀木<sup>カ</sup>地方に遁亡せり。王の闇殺せられしより、多くの博士教師等は、猛奸なる反對の臣足に依て殺害せられ、或者は捕縛にあひ、或者は反對の毒手にかゝり、或者は辛じて國外に遁亡し、西藏には出家沙門の殆ど一人も残らず殺害せられて、大破壊を行へり。斯くせること十七年間にして西藏は全く闇黒時代に陥入りぬ。

その後西藏を統轄せし王の若干名ありしも、時々紛擾を醸し、國家一日も寧謐ならず。加之彼等は無法の君主にして、善良なる風習國體を破壊し去るが故に、諸の有道の君主は遠くガール地 (Zatāi Ri) の上方に隱遁せり、(譯者云ガール地は、上古代に在てはプラング Purang、シヤンシェン Shan-shin 及びマンユル Mai-Yul の三地方より成れり。

## 第二節 西藏國外に於ける佛教再興時代

**西藏佛教回復** 拉薩より南方一日里程の地方に於て、西藏の四大山の隨一として有名なるバルツェンチュボ山 (dPal-Ghen chu-Ro) あり。此山中に籠りて觀念の眞月を眺めつゝありし喇嘛ツァン・ラブサル (gTsan Rab-gSal) ンヨグチュン (gYo gGe-lByun) ン、マル・シヤキヤムニ (dMal Chakya-Mu-Ni) の三人は、王の佛教破壊を傳聞して、密かに騾に荷物を搭載し、ガール地の上方に遁れ、西藏の東北ガルロク地 (Gar-Log) より迂廻して、遠く蒙古韃靼地方に落ち忍びぬ。然れども彼三喇嘛は蒙古の事情に闇きのみならず、蒙古語を通ぜざるより、言語文字の不同は佛教を容易に蒙古地方に傳導する能はざるを觀て、再び安土<sup>アムド</sup> (今の甘肅の西僻と青海との接境にして唐古感人種の巢窟地たり) のベロチャンオ地 (Be-Ro Cha-Tsho) に還り來り、黃河河畔のチャクラ・アンチュン・チーゾン (Brug-Ra An-Chun gNas-Rdsoi) 卽ち巖山アンチュンチー城に於けるダンディク・セルチャーヤン寺 (Dan Tig-gel-

Gyi Ya)に滯錫して専ら淨行修念に沈み、時を得て西藏佛教恢復せんことを期待したりき。時に此附近の黄河の河畔に牧畜せる牧羊人は、彼寺喇嘛の日々靜慮觀念の淨行に餘念なきを視て、夕景の頃家に歸り、人を集めて其由を語りぬ、寄集りし牧人の中に、ムズ・サルバル(Mu-gzu sSal-luBal)なるものあり。此話を聽きて頗る奇異の感に打たれ、去りて彼等喇嘛を訪ひ、願ふに自から出家たらんことを以てす。喇嘛等は此牧人の殊勝なる心根を稱して、戒律に關する一小冊を授けぬ、牧人之を熟讀し頓に渴仰の念を生じ、發心止み難く、感泣無量にして、強ひて出家の志願を遂げんことを乞ふ。乃ち相商量して牧人の志願を遂げしめんとして、ツアン・ラブサルは老長となり、ヨーゲーチユンは教師となりて彼牧人を得度して沙彌となし、長老より新たにゲーワ・ラブサル(dGe-Ba Rab-gad)てふ法名を授けぬ。ムズ・ラブサルなる一牧人は此に一沙彌となりて其名をゲワラブサルと呼ばれぬ。彼は其の後具足戒を受くべく乞ひしも、此時比丘の人數に於て不足を告げしかば、直に行ふ能はず、具足戒の式を執行せんには、其が法規として是非共五人の比丘なかるべからず、其中一人をも缺かば具足授戒の要素を失ふものなり。

**逃亡者の具足戒會再興** 此に於て先きにランダルマ王を殺害して逃亡し來りしハールン・バルデールゼ等の三比丘のロンダン地(Klon-Tan今の甘肅省唐古感人種の部落)に隱遁せるを傳聞し彼處に彼三比丘を尋ね邂逅して、事の由を告げ、具足會の比丘たらんを懇請す。彼曰く、我はランダル



マ王を闇殺し、罪の甚だ輕からざるものなれば、五人の比丘の中に伍して具足會の聖職を勤むるを得ず、然ども私の代りに支那和尚を尋ね求め、支那の比丘を請じて其の聖務の不足を輔ふも亦可ならずやと、仍てツァン・ラブサルは老長となり、ヨーゲーチュン<sup>Yueh-chün</sup>は規範師を勤め、マル・シャキヤムニ<sup>Mahāśākyamuni</sup>は祕密尋問者<sup>(Sai-Ston)</sup>の役を務め、支那の二比丘を招聘し來りて、そが不足の數を補充し、茲に五名の比丘相寄りて具足戒を成就せり。具足戒を授かりしゲーワ・ラブサルは更に老長よりラツェン・ゴンバ・ラブサルなる戒名を受けぬ。その後彼は四分律を體得し、彌勒經、般若經、因明等に精通し、德行稍く圓滿に近づくや、彼は諸處を遊歴し、佛教再興に意を注ぎぬ。ダンディク地の庶民は佛教に歸依する者多くして、彼は彼地に招聘せられ、彼處に巡錫して布教傳導に盡し、かは、彼が傳導の効果は極めて曠大に趣き、德化四方を風靡し、處々には殿堂を建て、寶塔を築き沙門信者を養成するに、年に月に盛大に趣きつゝありしなり。

**全藏の十哲** 此の時に當りて、中藏のルーメー<sup>(Ku-Mes)</sup>地よりは、ツチム・セラブ<sup>(Tshul-Krims</sup>

<sup>Ges-Rab)</sup> ヌイーシ・ヨンバン<sup>(Ye-Ges Yon-Tan)</sup> ヌ<sup>ラ</sup>クシ地<sup>(Rag-Gi)</sup>よりは、ツチム・チュンチ<sup>(Tshul-Krims</sup> hByun-gNas)<sup>ヌ</sup>ト地<sup>(Rba)</sup>より、チムローン<sup>(Krim</sup> Blo-Gros)<sup>安土</sup>のスム<sup>バ</sup>地<sup>(Sum-Pa)</sup>よりは、イーシロー<sup>(Ye-Ges Blo)</sup>の五人來り、後藏グルモ・ラブカ地<sup>(hGur-Mo Rab-Kha)</sup>よりは、ロートン・ドルゼ・ナンシユク<sup>(Lo-Ston Rdo Rje dPañ-Phyug)</sup> シャン・ホガ地<sup>(Gab-Sgo</sup>

Lha)よりは、ツォンツン・セラブ・センゲ (Tshon-bTsun Ges-Rab Sen-Ge)、ガーリ地 (m'Naha-Ris)よりは、オッチャ・ブニ (Hod-bRyad Shun-g'Nis)、ボド<sup>ン</sup>地 (Bo-Do<sup>n</sup> 扎代倫布の西北)よりは、ウバデ・カルバ (Au-Pa-De dKar-Ba)の五人來り、共にラーツェン・ゴンバ・ラブサルに具足戒の授戒を乞へり。仍てラーツェンゴンバ・ラブサルは長老となり、ツァン・ラブサル及びヨーゲーチュンは規範師兼祕密尋問者の任を勤め、マル・シャキャムニ及び支那比丘は開口の任を務めて其不足の缺を補充し、以て彼等十名に具足戒を授けぬ。是より彼等十名はラーツェン師に従ひて毘那耶を學び、學業漸く熟達するや、各自衛藏<sup>ウイツァン</sup>に還りて佛教再興に従はんと決し、師に面して曰く、ロートン比丘は法力大なるものあるが故に、教法を護持するに適すべく、ルーメーのツチム・セラブは精進なるが故に、長老の任に堪ゆべく、ツォン・ツン・セラブ・センゲは性格嚴正なれば教師たるべく、イーシ・ヨ<sup>ン</sup>ダン<sup>ン</sup>は聰明敏秀なるが故に、寺境を管するに適すべし。是等各人の能力に憑て佛教恢復に勉めなば、希くば佛教を顯揚するを得ん歟と。仍て十人は共商して衛藏<sup>ウイツァン</sup>に還らんと決議するや、ロートン・ドルゼ・ワンシュクは衆に謂て曰く、諸君は此に留るべし。予は安土地<sup>アムド</sup>の商人に混して衛藏に至り、彼地の人民の氣風狀態の布教宣布に適するや否を視察せんとす、若適當なりせば、予は留止して諸君に來藏あるべきを告げん、若不適當なりとせば、予は直に還り來るべしとて、彼は商隊に伍して行きぬ。商人等は思へらく先づスムバ (Sum-Pa) 地方に行商して、而して後ち郷里に還るこそ然るべ

けれど議しければ、彼は商人に謂て曰く、兄等よ、中藏は商業を營むも利あらず、宜しく後藏に至りて商ふべし。若兄等後藏に至らば、グルモ・ラブカ地に予が父ロナ・ツクナ (Lo-Nad of Tsug-Na) なるものあり。彼に面晤して、汝の男は出家して今や中藏に來れる由を告げられんことを乞ふ。諸商隊はロドンの言に依り、グルモラブカ地に至りて貿易し、多くの利潤を獲たり。此の因縁により後世彼地をツォンデー (Tshon-jh-Dus) と稱して有名となれり。

**復興事業** 斯くしてルーメー等の九人は衛州<sup>ウイ</sup> (中藏) に來りしも、當時拉薩は尙排佛徒の餘煙滅せずして、未だ布教に適當ならざりしかば、去りてサムエー地に行きぬ。ルーメーはチュ〜寺 (Chu-Chu) に住し、ヅ地のツチム・ローレはブルツ寺 (dBur-Tshul) とブツェ寺 (dBur-Rise) とを管理し、ラクシ地のツチム・チュンチはゲーゼー (dGe-Rgyas) を管し、チン地のイーシ・ヨンダンはザンカン (Zain-Khan) に住し、各人布教に奮勵し、子弟を集め僧伽を養成せり。

**ルーメー師の下** 其後此十人は袂を分ちて地方に游歴し、衛藏の村落に入りて弘通し、處々に於て沙門となるもの多きを加へ、西藏の佛教稍く萌芽を發するに至れり。ルーメーはラモ・チャクデウ寺 (La-Mo Phyang-Dehu) を建勅して多くの弟子を薰陶せり。ツチム・チュンチはチェンゴン寺 (bPhren-Gon) を建て徒弟を集め、ツチム・ローレはユングル寺 (Yung-lu-Gur) を創設して法幢を樹て、イーシローはロタン地 (bBros-Thaṅ) にミール寺 (Rmi-Ru) を建て、法鼓を鳴らし、衛州<sup>ウイ</sup> の五賢亦多く

の學徒を教育し、相互に布教に盡瘁して、以て諸方に教法の恢復宣揚を企てぬ。就中ルーメーは他の九賢に秀で、布教の効果著しく、彼に師従する學徒頗る多きを加へ、法旗堂々として西藏佛教復興の偉業全藏を風靡するに至る、ルーメーの門下にして秀才なるものは左の如し。

一、チュメル地のツチム・チュンチ、  
(Gru-Mer Tshul-Khims hByun-gNas)°

二、シヤンナナム地のドルゼ・ワンシユク、  
(Shan-Sna-Nam Rdo-Rje dBan-Phyng)°

三、ドク地のチャンチュブ・チュンチ、  
(Rdog Byan-Chub hByun-gNas)°

四、ラン地のイーシセラブ、  
(Klan Ye-Ges GesRab)°

五、ズイ地のドルゼ・チャルツァン、  
(gZus Rdo-Rje Rgyal-mTshan)°

此優秀なる門下生の中、ツチム・チュンチはソルナグ・ダンボシェ寺(Sol-Nag Thau-Poche)を創建して學徒を養成し、ドルゼ・ワンシユクはトルンラツァク寺(Stad-Rui Ra-Tshag)及び拉薩の北方バン地(hPhan)にチャル・ハーカン堂(Rgyal Lha-Khan)を建創して布教せり。チャンチュブ・チュンチはエラル寺(Yer-Bar)を建て、僧伽を養成し。イーシ・セラブはチャル・サルガン寺(Rgyal-gSal Sgan)・ラクダー寺(Klag-mDaba)及びツァル・チュン寺(mTshal Chun)を管して教團を開き、ドルゼ・チャルツァンはルーメー地にマイーカ・チュ寺(Ma-Yas-Ka Chu)・<sup>ヤールンツァンボ</sup>雅龍藏布の河畔にツァンタン寺(hTsan-Thau)及びロカム寺(Rol-Rkam)の三寺を管し、毘那耶に據りて學徒を教育し、教法興隆復興に専心

是れ努めたり。

### 第三節 毘那耶繼承の上下兩系

**下系の毘那耶** 毘那耶の下系(後系<sup>マドウル</sup>Smad-i-Du)は班抵達<sup>バンディタ</sup>デナ・ミトラ及び翻譯家<sup>ロツアワ</sup>ルーイ・チャルツァン(Kluhi Rgyal-mTshan)はツァン・ラブサルと、ヨーグーチュン及びマルシャキャムルとの三人に毘那耶を傳授せり。彼等はラツエンゴンバ・ラブサルに附屬し、ラツエン師はチュムイーシ・チャル・ツァン(Grum Ye-Ces Rgyal-mTshan)に附屬す。彼はルーメー地のツチム・セラブに傳へ、ツチム・セラブはズイー地のドルゼ・チャルツァンに傳承せり。

**上系の毘那耶** 毘那耶の上系(前系<sup>ドウル</sup>Stod-i-Du)は班抵達<sup>バンディタ</sup>デナ・ミットラ及びダーナ(Da-ha-Na)の二人はシャキャセンゲに附屬し、シャキャセンゲはダルマーバーラに傳へ、ダルマーバーラはチュメル地(Gru-Mer)のツチム・チェンチの弟子チャチ地(Gru-a-Phyi)のルブロマフ(Klubs Lo-Tsha-Ba)及びチョクドウル・ジン(Skyogs hDul-hDzin)の二名に附屬す。ズイ地のドルゼ・チャルツァンは彼等二名に師從して毘那耶を學び、而して之をチボ地のチャクバ・チャルツァン(Sne-Po Grags-Pa Rgyal-mTshan)に授く。チャクバ・チャルツァンは之をソク地のツチム喇嘛(Sog Tshul-Khrims Bla-Ma)に傳系す。而してチャ地のワンシユク・ツチム(Rgya dBain-Phyng Thul-Khrims)はツチム喇嘛に従ひて學

びたり。ワンシュク・ツチムの傳系は下に至りて説明すべし。

又ズイ地のドルゼ・ヂャムツァンは、カチュバ人(Ka-Chu-Ba)のツチム・チュンチに傳へ、彼は之を學びてニャンツァン地(Myah-mTshaus-Pa)のリンシェン喇嘛(Rin-Chen Bla-Ma)に傳系せり。而してワンシュク・ツチムは亦此リンツェン喇嘛に就て學受せしものとす。

**前後兩系の繼承** 又ズイ地のドルゼ・ヂャムツァンは、ジンバ・セラブ・オッド(hDsin-Pa Ges-Rab Hód)に附屬し、彼はコチバ人イシ喇嘛(Ko-Khyin-Pa Ye-Ges Bla-Ma)に附屬しぬ。ワンシュク・ツチムは亦此イシ喇嘛より相承せり。斯くしてワンシュク・ツチムは之をズイ地の秀才三名に傳へて、上系毘那耶と、下系毘那耶即前後兩系の一切傳繼を全く成就して教學を隆盛ならしめき。

**ドルゼ・ワンシュク門下の傳導** 西藏佛教復興者として尤も有名なる後藏の五哲中、ロートン・ドルゼ・ワンシュクは、クルモ・ラブカ地にチャンゴン(Bgyan-Gon)伽藍を建勅して學徒を教育し、ツォンツン・セラブ・センゲはチャチュ寺(Bya-Rgyus)をヂイ地Rtssに建てぬ。又ヤンベン寺(Yan-dBen)及びロングルミク寺(Ron Nur-Smig)を管す。他の三名亦多くの寺院を建て、専ら復興事業に熱中盡瘁せり。ボドン地のウバデ・カルバはボドン寺(Bo-Don)に住してガリ地のおッドチャブニと協同して僧伽の擴張を謀り、曾て歴史に見えざる程聖法を弘通して、嚴正なる戒律を以て人民を開導し、沙門出家を度すること頗る多かりき。

ロートン・ドルゼ・ワンシユクの門下にして優秀なる者二十四名は左の如し。

- 一、ヂヤ地のシヤキヤ・シヨンス、  
(Rgya Chakya gShon-Nu)°
- 二、チヨ地のセラブドルゼ、  
(Skyo Ces-Rab Rdo-Rje)°
- 三、セツン地のイーシツオンチュイ、  
(Se-bTsun Ye-Ces bTshon-ñGrus)°
- 四、タグロ地のシヨンスツオンチュイ、  
(Stag-Lo gShon-Nu bTshon-ñGrus)°
- 五、シヤブ地のチャルバ、  
(Ceb Bya-Ru-Ba)
- 六、アメー地のシユ・チクマ、  
(Ame Shu gCig-Ma)°
- 七、ドク地のセラブヂェンネ、  
(Rdog Ces-Rab ñByun-gNas)°
- 八、ラン地のツンチャンバ、  
(Glaiñ bTsun Byams-pa)°
- 九、ゴバ地のイーシ・ユンチュン、  
(mGo-ba Ye-Ces gYun-Drun)°
- 一〇、ツエ地のツン・セラブヂェンチ、  
(Sce bTsun Ces-Rab ñByun-gNas)°
- 一一、ヂ地のイーシワンボ、  
(Kyi Ye-Ces dRan-Po)°
- 一二、ツエ地のツン・カルボ、  
(Lce bTsun dKar-Po)°
- 一三、ユン地のトンツァ・カーリワ、  
(gYun Ston-ñDzha dKa-la-Ri-Ba)°
- 一四、シヤブツエ地のチトシ・ツオンチュェル、  
(Ceb-Rtse Khri-Ston bRton-bGrus-ñBar)°

一五、サルワド地のツンチュン、  
(Srbad bTsun Chun)<sup>o</sup>

一六、ヂャトン地のアールヤ・デヴ、  
(Rgya-Ston A'iya De-Ba)<sup>o</sup>

一七、アールヤデヴの弟子シヨンス・シャキヤ、  
(gShon-Nu Shakya)<sup>o</sup>

一八、同弟子シヨンス・ヂュンチ、  
(gShon-Nu bZyui-gNas)<sup>o</sup>

一九、ヂ地のツンバルヂ・イーシ、  
(Kyi bTsun-dPal-Gyi Ye-Ges)<sup>o</sup>

二〇、(以下略之)

**弟子二十四名の分境的布教** 彼のヂャトン地のシャキヤシヨンスはトマル・ラタン寺(Stod-Mar La-Tan)を創建して學生を教育し、教法宣揚に盡す。チヨ地のセラブ・ドルゼはドンモリ寺(Do-Mo Ri)を建て、セツン地のイーシツォンチュイはチョンバヂャン地(Grom-Pa Rgyan)に法輪寺(Chos-lukhor)を建てぬ。タグロ地のシヨンスツォンチュイは、タクローハーカン堂(Stag-Lo Lha-Khan)を建て、シャブ地のチャルバは舊寺院に住して學徒を集む。アマー地のシユクマは、チャン地(bPran)及びチャクマル地(Prag-dMar)に於ける寺院に滯錫して教學復興に熱中す。ガル地のシャキヤヨンドンはズンボ地(gZun-Po)の寺院に據りて布教し。リ地のローンシヨンスは、ジヨモ寺(Jo-Mo)を建て、法幢を張る。ラク地のチャンユブ・ヂャルツァンは、チュシク寺(Chu-Mig)を建て法雨を注ぎ、ガー地のセラブ喇嘛子ム寺(Shems)を建て、ド地のセラブ・ヂュンチは、バンカル・ハールン寺(Span-d



Kar Lha-Tun<sup>1</sup>を建て、ラン地のツンチャンバは、ウムブク寺(Hum-Phug)を建て、ゴバ地のイーシ・デエン子は、ブレハーカン寺(Sbre Lha-Khai)等に住して沙門を化し、人民に教法を説法して布教の効果著しきものありき。ツェ地のツン・セラブデエン子は、シャル(Sha-Lu)の伽藍を創創し、多くの出家を度し、或は諸方に秀才を派遣して佛教興隆を圖る。世に之をシャル・チャロール(Sha-Lu bRgya-Skor)と稱して有名なり。デ地のイーシ・ワンボはシヤン地(Gais)にカルン寺(mKhar-Jui)を建て、ツェ地のツンカルボは、アンイク寺(Ai-Yig)に住して傳導す。ユン地のトンザ・カーリワはオル寺(Hor)に住し、シャブツェ地のチトンツオンチュイバルは、シオンナラ寺(gGon-Sna-Ra)に住し、サルブド地のツンチュンは、ラチュン寺(Brai-Chun)に住持し、ヂヤ地のトンアルヤ・デワは、クルドゥナ寺(Kü-Rü-Du Sna)に住職して布教す。其弟子シヨンス・シャキヤは、サブク寺(Sa-Phug)に住し、同弟子シヨンス・チュン子は、ヂヤンカル地のトゥルハー寺(Thus-Lha)に住持し、ヂ地のツンバルヂ、イーシは、レブン寺(bBras-Spuñ)の伽藍に住して、各自に僧伽教團の擴張を謀り、教法の恢復に餘念なかりき。

**ゾンツン・セラブ・センゲ喇嘛の弟子** 又藏州<sup>ツァン</sup>(即後藏)の五哲中、ツァン地のツォンツン・セラブ・センゲの門下には優秀なる學生多く出で、皆傳道布教に巡錫し師の意誠に酬ゆるあらんとして各地に游歴布教しぬ。今ツォンツン・セラブの門下にして尤も優等なるものを列舉せば左の如し。

一、ワ地のツン・ローレー・ヨンタン、  
(Rba bTsun blo-Gros Yon-Tan)°

二、ラ地のローレ・ザンボ、  
(Ra blo-Gros bZan-Po)°

三、同 ツチム・センゲ、  
(Tshul-Khrims Sen-Ge)°

四、チャ地のチャルグ・センゲ、  
(Rgya Rgyal-Gu Sen-Ge)°

五、マルバ地のドルゼー・イーシ、  
(Mar-Pa Rdz-rJe Ye-Ges)°

六、シャン地のツアル・チョバ  
(Shan Tshar-Khrod-Pa)

七、ワ地のゲントン、  
(Rba dGe-nThon)

右の中、第一者は師の命に依りてチー地のヤンベン寺(Rtseis Yai-dBen)に住持して傳導に従事せり。彼の門下にして卓學慧才なるもの二人あり、一はヨル・ツェワン(Yol Chos-dBan)にして、チーニン寺(gNas-Rnin)に住す。二はヨルトク・ベウ(Yol-Thoy bBeu)にしてニヤントチャンラ寺(Myain-Stod Lcain-Pa)に住す。此二大弟は銳意布教傳道に身を竭し、英才卓慧の沙門を養成しぬ。されば此二大弟の薰陶を受けて世に著れし聰明の門下甚だ多く、彼等各自は諸方に游歴して教學興隆に奔走しぬ。次に第二輩は亦師の命を奉じ、ニヤンツェイ寺(Nan-Tshos)を管し學生を集めて教育に盡す。第三は亦師命に依てグルミク寺(Nur-Sning)に錫を留め、其子弟ランデイ・ダルマニンボ(Brai-Ti Dar-Ma Shin-Po)と共に協同傳道し、叙上の上系毘那耶と、下系毘那耶との繼承を以て佛教を宣布

せしかば、布教の效果著しく顯はれ、教勢益盛大を極むるに至りしなり。第四輩は亦師命を奉し、タクツアル地 (Stag-Tshal) のチャツホ・カルボツセ寺 (Bya-Chas mKhal-Po Che) を管轄し、チャタ<sup>ン</sup>寺 (Grwa-Tha) を建てぬ。第五輩はマルシ<sup>ン</sup>地のモンロ寺 (Mar-Qul Smon-lu Gro) に住して傳導せり。第六輩は師命に依り、セル地のゴンチ<sup>ク</sup>寺 (Gser Sgori Phrog) に住し、同處に於てチャシ<sup>ヨ</sup>寺 (Hrag-Qod) を建て、學堂を開き人材を養成しぬ。第七輩は亦師命に依り、ラソク・ツアル<sup>ハ</sup>寺 (Rag-Sog Tshar-lha) 及びタクツアル・カルモ寺 (Stag-Tshal mKhar-Mo) に住し、僧伽を集め淳々乎として教學の隆盛を圖りぬ。此の如く藏州<sup>ツァン</sup>の五哲は各自に門戸を張り、教團を設置して人材を育陶し、專心に教學の擴張に依て西藏佛教の恢復を遂げんととして、傳道の活潑なる、所有手段と勇氣とを鼓舞して、之れが盡献に従事したり。

**毘那那の三系** 又衛州<sup>ウイ</sup>の五賢ルー<sup>メ</sup>等は其門下八名と共に、中藏の各地に巡錫し、出家沙門の隨喜者を度し、釋教の宣布を勵みて復興の業を成就せんとす。而して此衛藏<sup>ウイツァン</sup>二州の十賢は、ドカム地 (mDo-Khams 今甘肅省安土の地) に來り、ラツエンゴンバ・ラブサルに師從して具足戒を授かり、四阿含を精研し、去りて再び衛藏に歸り、教團を作り、戒律的淨行を以て佛教の精氣を刷新し、極めて清淨に佛の法を宣揚しぬ。西藏の麓なる安土<sup>アムド</sup>地方より傳繼せし戒律傳系なるが故に、卽是れを名けて下方、或下系毘那耶派 (Sma<sup>ア</sup>-bDul-Pa) と稱するなり。西藏には此下方毘那耶傳系と、上方毘那

耶傳系と、其他班禪傳系との三派の毘那耶繼承ありと知るべし。

## 第六回聖典翻譯

上方毘那耶の傳系事情に就て少しく叙述せん歟、當時の藏王ツァンポ・コルン (bTs

<sup>a</sup>h-Po bKhor-Re) は王位を弟に譲り、自から出家して名をイーシ・オッド (Ye-Ges Hod 智光) と稱し

ぬ。彼は祖宗スロン・ツァン・ガンボ王、チースロン・デツァン王、及びチーラルバ・チャン王の三王が爲せし偉業を後代に護る爲めに、西藏王國に佛教を擴大宣布せんと欲して、ランダルマ王の破壊後に於ける佛教の恢復を挽回せんには、印度に留學生を派遣し、新來の智識と將來の經典とに依て、復興事業を完成せんと期しぬ。乃ち彼はリンツェン・ザンボ (Rin-Chen bZan-Po) 等の青年二十一名を印度に派遣して遺法を尋繹探究せしむ。此留學生中、リンツェン・ザンボと、レクビーセラブ (Legs-Paḥi Ges-Rab) とを除いて餘の十九名は、不幸にして死を招きて其の目的を達する能はざりき。リンツェン・ザンボは一切の曼特羅 (Sāṃge) を研究して造詣甚だ深遠なり。而して彼は班抵達シュラードハ・カラヅルマ。バドマ・カラ・グブタ。ブツダシュリーシャーナタ。ブツダ・バーラ、及びカマラ・グブタ等を招聘し來りて、三藏其他の諸疏を譯出せしもの多し。

又班抵達ダルマバーラ及びブラジュニャバーラを聘し、シャンシュン人ヂャルビー・セラブ (Rgyal-baḥi Ges-Rab) は彼に就て戒法誓約を學びぬ。而して後ヂャルビー・セラブは、チバル國に行き、持戒者ブレタカ (Pre-Taḥ-Ka) に戒律の實修を乞ひしかば、ブレタカは彼と自己の弟子バルチョル・セ

ラブ (dPal-hbyor Ges-kab) の、シンモツェ族チャンチュブ・センゲ (Shin-Mo Che-Pa Byah-Chub Sen-Ge) とに毘那耶を敎授せり。即ち上方毘那耶傳系は、始め釋迦より其子羅睺羅等と次第傳承して、班抵達ダルマバーラに至り、次でシャンシユ人チャルビー・セラブ。バルチョル・セラブのシンモツェ人チャンチュブ・センゲを経て、ゼツン・レダーワ (Rje-bTsun Red-mDag-pa) 、及びデェツヤブ・ダルマリンツェン (Rgyab-Tshab Darma-RinChen) に至るまで瀉瓶一如に繼承して、毫も間斷なかりしなり、是を上方の毘那耶の傳系と稱す。

## 第四章 西藏佛教混沌時代

### 第一節 佛教刷新の氣運

**秘密修驗派の流行** ガーリ地に住して沙門の敎育に熱心なる護法家イーシ・オッドは、翻譯家、班抵達を集めて三藏を始め諸典註疏を翻譯し、或はドーデイルセル地 (mTho-Stil gSer) に殿堂を建勑して異解異端者を放逐し、以て佛教正統派の敎理を主張せり。然とも當時に在ては、佛教の敎訓三藏と優婆提舍とを精密に知る者甚だ稀なり。殊にベンガル人シャンタブ・ゴンボチャン (Cam-Thabs Shin-Po-Can) 等は、金錢財寶を求むる貧欲心を懷ひて法を説き、一般西藏人民を誘惑欺瞞せしのみならず、或者は秘密修驗者なりと稱し、諸の沙門に不正の法を説きて人を誑惑毒誘するもの多かり

き。此に於て護法家イーシ・オッド及び其甥チャンチュブ・オット(Bryani-Chub Hod)は憤慨に堪へずして、之が刷新の方法を講せんとしぬ。祖宗各代は千辛萬苦を凌ぎて佛教を藏内に宣布し、そが恩恵力に依て藏民の開發を企て、風俗を革め、民智の進歩を圖り、佛光殆ど沖天に昇りしが如き盛大の偉觀を呈せりと雖も、その中途に於て、不幸にしてランダルマ王の破壊に遭遇し、國民の逆殺逃亡と國家の騷擾とは、西藏を擧げて闇黒時代に化したり。然も闇憺たる妖雲一時天地を掩ひ盡くすも永く月光を障蓋する能はず。佛光亦無邊際を照らすなり、西藏の東方安土地アムドより殘煙を揚げて佛教萌芽し、熱誠なる傳導者の布教盡瘁の偉効は、漸く佛教の廢頽を挽回して、將に旺盛隆大の教勢を見んとするの氣運に際せるにも拘はらず、今再び此の如き粗暴なる沙門の素行顯はれ、教法の清規を汚濁するに至りしなり。殊に其弊害の甚だしきに至りては、雷に沙門出家の行規の法に悖るのみに止まらずして、そが深甚至奥なる教理上の解釋と悟道の樞機に觸れて、荒蕩無稽の説を立て、淫りに正統の教理を掩ひ亂さんとするに至りては、眞實護法を以て任する者の默視する能はざるところなり。彼等多くの異解者は、淫りに自己の私義を以て合一的經一と曼特羅との教理を分離し、二者殆ど水火の相容れざるが如く執して、正道を去る甚だ遠きに達せんとせり。正統派の彼等は經と曼特羅とを同行合一せしめて、完全無缺の佛教たらしめんと思惟せるが故に、イーシ・オッド等はチャ地のツォンセン(bTshon-Sen)ナグツォ地のツチム・チャフ(Nag-Tsho Tshul-Khrims Rgyal-Ba)

と共に印度に至りて阿提沙及び羅喉維耆多等を招聘せんとす。(譯者云ツチム・ヂャワなるものは阿提沙招聘の爲めに摩揭陀國に至りビクラマシーラ寺に住する三年に及びぬ。)

### 阿提沙の招聘

此時阿提沙は印度を立ちてチバル國に巡錫し、一年を経てタンビハラ地(Tha-Bi

Ha-Ra)に於て一字を建て、沙門を教育しつつありしなり。一行中チャンチュブ・オッドは阿提沙に願ひて曰く、昔有道の君主多く出で、佛教を保護せしも、中途に及び暴逆無道の君王出で一度佛教を破壊せり、然ども精進慷慨の沙門出で、其を恢復し、將に教法の盛大ならんとせる時機に際して、再び淨行亂れ不法暴行を逞ふするに至りぬ。之を矯し之を改めて如來正法の規矩に準せんと欲するには、如何が之を處し、如何が之を改導せば可なるや、尊者よ、希くば吾等にその指導を垂れよと阿提沙は佛陀の説き給ひし一切の説法は、三藏に集まりて餘蘊なく、是れ等しく菩提の燈明、航海の般筏なりとて、彼の優婆提舍を講説し、西藏に教法を傳播するも、就中教法の根本たる解脫戒の弘通は最も必要にして、持戒修養の淨行は、沙門比丘の生命たる所以を説きぬ。阿提沙は西藏に巡錫以來、西藏佛教が如來の正規を離れて稍々衰頹腐廢の現象を顯はせるを視て深く慷慨し、彼等に勉めるに斯る教義に基き、専ら戒律淨行を榜標しつ、別に純潔なる道德的一宗派を開きガールダムバ派(hGala gDams Pa)を稱して、茲に一軌軸を樹てたり。

## 第二節 ガーダムバ正統派の確立

**ガーダムバ派の教義** 阿提沙の開きしガーダムバ派には多くの秀才龍衆出でしも、その最も有名な者は、ボトバ人リンツェン・サル (Bo-Ta-Ba Rin-Chen gSal) チャンガ人ツチム・ズン (Spyan-Sia T'shut-Khims bBar) プチェン人シヨンス・チャルツァン (Phu-Chui-Ba gShon-Nu Rgyal-mTshan) 是れなり。是を阿提沙門下の三兄弟と稱して最も俊才なりとす。其他ランリ・タンバ (Glan-Ri Than-Pa) ミヤラワ (Ga-Ra-Ba)、ヤカワ (bChad-kha-Ba) 等の上足あり。

ガーダムバ派の説に依れば、經と曼特羅との合一的觀行修道は、菩提に至るべき資糧にして、經と曼特羅との分離的修行は、佛教の正意に反するものなれば、之が修養は、一に戒法が示す清規を遵守するに由て達せらるゝものなりと。然らば彼及び彼の門下の上足等は、斯る教義に據りて宣説し、嚴肅なる義風を擴張して、三經の法音を鳴らし、當時汚濁の空氣西藏佛教を掩ひたりし際、南方の一角より霹靂たる電光發し、轟々たる雷鳴天地を震動せる後驟雨一過して、清涼快晴なる霽天となりしが如く、阿提沙の道義的戒律比丘派のガーダムバ派なるもの起れり。此に於て庶民之を仰ぎ、學徒之に聚り、西藏佛教を刷新せんとするもの多きを加へ、後の代に宗喀巴起りて大改新を絶呼し、グルクバ派を開くに至れる先驅となせしものと謂ふべし。



**第七回聖典翻譯** 三兄弟 (Skun-mChod gSum) 等の弟子、ゴク地人レクビー・セラブ (Khog-Pa Legs-

Pali (Yes-Rab) はサンブ・チャトク寺を建立して學生を教育す。彼の甥ローダン・セラブ (Blo-dan Yes-Rab) は印度に遊學し、印度語に熟達し、歸藏の後、經典疏註を譯せるもの頗る多し。その翻譯書の主なるものは、大般若經と、その註釋書となり。彼の廣大なる翻譯事業に依て、大に西藏佛教の發達を促し、宗教者としての偉勳赫々たるものありしかば、後世の賢哲は、彼を讀へて大翻譯家と稱しぬ。而して彼の門下は非常に多く、拉薩に在りては一萬三千七百餘人、サムエー廟に一萬三千人、デヤンカル (Rgyari-mKhar) に二萬人、ガンラム (Nan-Lam) に一萬人ありしなり。

**ワンシユク・ツチムの傳道** 各門下の熱誠不撓の精神と、各自の性能に隨て布教に貢獻せるも、就中阿提沙の開きしガーダムバ派の正統敎義を熱心に鼓吹し、ガーダムバ派を確立して、その派に盡瘁勤勞ありしものは、上記の三兄弟と稱せられし門弟なりき。彼の三兄弟が其時代に適應すべく敎義を擴布して、師の敎理に準じて當時の佛教を改排せんと努めたり。恰も此際に當りてデヤ地 (Rgya) に一異彩出でたり、そは誰人なるか。ワンシユク・ツチム (dBan-Plyng Tshul-Khims) なるもの是れなり。彼はニヤント地の上部 (Myai-Stod) の一部たるチャ・ラルメモ・ンク地 (Rgya-Ma Rai-Me-Mo Phag) に生れぬ。幼にして父母に離れ、悲嘆遣る方なく、遂に法を求めて父母の菩提を弔はんと志し、チャロクツァン寺 (Bya-Rog Tshan) に入りしも、容貌陋醜なりとて衆の嫌惡する處となり

留る能はず、去りてガーワドン寺(dGa-ha-Ba gDon)に轉ず。彼固と赤貧洗ふが如く、食ふに食物なく被るに袈裟なし、人の住房を貸與するものなく、自から洞窟を穿ち、糞を敷きて内に蟄居す。然ども彼が出家求道心の燃ゆるが如き熱誠は、洞窟の内に起居し乍ら、日晝中阿含を誦讀して殆ど其意義を了解するに至りぬ。

此に於て發心の念逾固く、出家希望の心止み難し。仍てズイ地の大持戒者ドルゼ・チャルツァンの四大弟子中の高弟、ラン地人ツチム・チャンチュブ(Tshul-Khrims Bya-Chub)に従ひて出家しその名をワンシュク・ツチムと命ぜらる。彼は師に就て佛典を研究せる傍ら、更に師の四大弟子チボ人チヤクバ・チャールツァン(Sne-Po Grags-Pa Rgyal-mTshan)、<sup>ボ</sup>地の人ツチム・チュンチ(Tshul-khrims Jbyun-Nas)等、其他ソク地の人ツチム喇嘛(Tshul-Khrims Bla-Ma)、<sup>ウイツァン</sup>チム人イシ喇嘛(Ko-Khrim-Pa Ye-Qes Bla-Ma)等の三名と、衛藏兩州の多くの學者有徳に會參して、殆ど三十四年間彼等先輩の薰陶指導を受けぬ、彼は諸典に精通せし中、尤も四阿含に明かなり。彼は越えて三十五年目に自から傳道に従事し始めしより、其年八十五歳に至るまで、布教と教育とに東西奔走して寸毫の閑を得ざりき。彼が晩年に及びては、ナム地のガーワドン寺に送り、或は上方ニヤント地のチュミク・ルン寺(Myañ-Stod Chu-Mig Lun)を管して法源を作り、毘那耶の註釋を著し、解脱戒經に關する講義をなしたり。

# 甘珠爾部の請來

此時チーリン地 (Ye-Rim) よりチトン・シハチャク (Skyid-Ston Chos-Grags) 來りて彼に師從し、才學衆に秀でぬ、ドル地 (Dol-Ba) の學者ヤガバ・シホンボ (Ya-Gad-Pa Chen-Po) はガールドン寺に彼を訪ね來りて講演を聴き、持戒淨行甚だ高かりき。シヤ地の比丘ツォンチュイバル (bRson-bGrus lBar) 來りて師從す。テンパ地 (Sten Pa) の譯家<sup>ハツア</sup>ツチム・チュン子は、十五歳のときワシシユク・ツチムに從て出家し、十九歳に至りて師の長老の下に具足戒を受けぬ。師は彼に訓して曰く、汝は印度に留學し、聖典の眞髓を研究して、教法と衆生とを利益擴大ならしめよと。彼は師命を賢みて印度に學び、印度の東西、及び中印度の各處に游瀝し、經と曼持羅とに關する總訓と特に甘殊爾部の諸傳系とを受けて西藏に還りぬ。現在の甘殊爾部に關する諸傳系は、即ち彼が恩惠に依て得られたるものとす。彼が西藏中世の佛教研鑽に貢獻せる偉勳者の一人として、後世に稱せらるゝに至りしも所以なきに非ざるなり。後ラーロ (Ra-lo) なるもの來りて師從し、ワンシユク・ツチム派を弘宣せり。師のワンシユク・ツチムは類齡八十歳に達するや、最早餘命も覺束なしとて門弟を集め、解脫戒經及其註疏等を講演して、清淨なる佛教の精神を鼓吹する約五年の霜星を経ぬ。命終の期近きては、チャクモ・バク地 (Srag-Mo Rhag) のローシヤン・チリン寺 (Ro-Yans Byi-Glin) に靜養し、辛亥歲享年八十五歳にして示寂せり。

### 第三節 教學の勃興

ワンシユクツチム派の教勢時代 大持戒者ワンシユク・ツチムは性徳柔和にして慈愛心に富み、子弟門下を薰陶する淳々乎として止まず、不撓不倦の精神は沙門教團養成に生涯を捧げしかば、其弟子にして學者たるもの、布教家たるもの、法に忠實なるもの、各々蘭菊美を競ふの秀才優英出で、師名一世に高く、法幢赫灼として、ワンシユク・ツチム派の教勢地方に充滿するに至りしなり。

門下の四柱 彼が四柱として有名なる門下を列舉せん。

一、藏州<sup>ツァン</sup>のダル・トゥルジン、  
(*ḥDar ḥDul-ḥDun*)。

二、ターシ地のドゥルジ・ニー、  
(*mThaḥa-bShi ḥDul-ḥDsin gNis*)。

三、衛州<sup>ウイ</sup>のジョダン地のナクポ・ダルツル、  
(*Jo-gDan Nag-Po Dar-Tshul*)。

四、マツォ地のチャンチュブ・ドルゼ、  
(*Rma-Tsho Byañ-Chub Rdo-Rje*)。

門下の十棟 又十棟としての秀才門下は左の如し。

一、ナル地のチャツル・ヨン、  
(*Snar Rgya Tshul-Yon*)。

二、同地のチャリン・ツル、  
(*Snar Rgya Rin-Tshul*)

三、チテル人リンツル、  
(*Sbyi-Ther-Ba Rin-Tshul*)

四、カル地のメートン、

(Kha-Ra Mes-Ston)

五、ジンバ地のメートン、

(jDsin-Pa „ „)

六、同 ロクニン、

(„ „ Slog-Suin)°

七、ドクバ地のイーシ・チャク、

(Ldog-Pa Ye-Ces Grags)°

八、ガリリ地のバルチョルセラブ、

(mNaRa-Ris dPal-jByor Ces-Rab)°

九、ニヤル地のダルマ・オツゼル、

(gNaI-Pa Dar-Ma Hod-Zer)°

十、ダクボ地のドウルジン、

(Dwags-Lo jDul-bDsin)

四柱門下の中、第一輩はチャンラ (Lean-Ra)、拉薩 (Ra-Sa) ボェン (Bo-Doñ) の各處に滯錫して教化に従事し、彼に従て沙門となるもの多し。第二輩はニヤン地 (Myan) のローウン・ブグ寺 (Ro-Hum Phug) に住して布教し、弟子となるもの多き中に、中藏のリンチャブ (Rin-Skyab) の如きは門下の俊才なりき。第三輩の如きは、年六十歳にして始めて出家せしと雖、精勵刻克、遂に三藏に達し、ヤルルン地のツァロン寺 (Yar-Klun Tsha-Ron) に住して傳導せり。世に之をツァロンバ派と稱して有名なり。彼の門下は甚だ多くして、チャミ人モンラム・オゼル (Ga-Mi Smoñ-Lam Hod-Zer) はンシユク・ツチム派の戒系を傳へしものなるも、更に師に就て毘那耶を學び、師の房に在て講筵を開き、精心に子弟の教化に従事せり。其の門弟にしてルブカル地のツチム・チャクバ (Klubs-dKar

Tshul-Khrims Grags-Pa) タクマ地の人カワ・ダルセン (Thag-Ma Ka-Ba Dar-Sen) 等出でしなりツチム・チャクバの弟子に、ナブ・ドルジン (Snab Ju-Dul-JiDsin) 及びツルジン・チャミ (Ju-Dul-JiDsin Grami) あり。ナブ・ドルジンは、ト地のヤーザン寺 (Stod Yaha-bZan) に住し戒律を主として徒弟を育す。ドルジン・チャミの門下にダルマイーシ (Dar-Ma Ye-Ges) あり。ダルマイーシの門弟にしてザーンゼンバ人ダルマ・ソドナム (Zais-Chen-Pa Dar-Ma bSod Nam) あり。師の意を繼傳して、ザンモ派を樹立せり。殊に持戒を榜標し、道義的敎團を養成せしが故に、學生多く集りて敎學盛に講じ、茲にザンモ派 (Zais-Mo) なる一旗色を招くに至りたり。

**ザンモ派の敎勢** ザンモ派を開きしダルマ・ソドナムの門下に、大堪布ツォナワ・セラブ・ザンボ (mKham-Chen mTsho-Sna-Pa Ges-Rab bZan-Po) あり。經律に精通し、疏註抄釋の諸書に造詣深くして、日月の光に似たりと稱せらる。殊に毘那耶の説明は最も得意なりしかば、後世宗喀巴起りて彼が講説を看て其の非凡なる技量を讃し、毘那耶に於ける有力なる主ツォナワと稱せり。

ツォナワ・セラブ・ザンボの門下にモンチャワ人ツチム・ラーシ (Mon Grwa-Pa Tshul-Khrims bKira-Gis) あり。其弟子にツェチャブ・ザンボ (Chos-Skyab bZan-Po) あり。師弟協力して敎化に盡す。ジャミ・モンラム・オツゼルの弟子たるカワ・ダルセンの門下にツォツェ人バルツェン・ドルシェン (gTso-Che-Ba gPal-Chen Rdor-gShon) 及びサンヤ・ボントン (Sais-Rgyas dBon-Ston) の二人あら。バル

ツェンはカワ・ダルセンの教義を奉じ、沙門教育に勉め、その弟子となれるもの甚だ多しとす。其弟子中ツォツェ地の人ナルデョル・チャンセン (Rnal-bDyor Bryan-SEN) と、ワルヂ地の人ツォンチュイ・ワシニク (Sbol-Ti bRtson-bGyus dBaii-Phyang) との二人は最も優秀拔群にして、各自共に多くの門下を有す。

**ローサ寺派の教學** ナルデョル・チャンセンは、拉薩の北方バン地のローサ寺 (lPhan-Yul Gro-Sa) に住して毘那耶を講説す、道俗參集する者雲の如し。カワ・トンナム (Ka-Ba Ston-Rnam) 等の多くの弟子出で、律の主要なる所以を主張しぬ。カワ・トンナムは、チャ地のプルチャク・ツァブ寺 (Bya Phul Brag Tshab) に住し、主として律を宣布す。殊にローサ寺に在ては持戒堅固の比丘多く出で、教法極めて旺盛に趣きぬ。ローサ寺派より出で、秀逸なる門下は、マルトン・バルダン・リンツェセ (mMar-Ston dPal-I dan RinChen) と、マルトン・デツォリンツェン (mMar-Ston Rgyen mTsho RinChen) との二人なり。彼等は師と協同して、佛教の腐敗を矯正し、道德的刷新を圖り、之を開導教化せんには、律の最も適當にして、律は釋迦の本質たれば、之を遵從する否とは喇嘛教の興廢に關するものたるを講明しぬ。此時グンドワンチュブ (dGe bDun Grub) は來りて此二人に師從し、大に才徳を研磨せり。

**ツォンチュイ・ワシニクの門下** 叙上のバルツェン・ドルシヨンの門下ツォンチュイ・ワシニクはシユ

ンテイモヂャ地(gShun Dus Mo Bya)に生れ、出家してヂャ地の學者ニヤモ・クル (Na-Mo Ku-Ru) を長老に仰ぎ、マル地のルンガン (Smar Sun-Sgan) に従ひて行を學び、バンゴン比丘(Spais-dGonis) の秘密尋問を受けて、無數僧伽の中に於て具足戒を授かる。後彼は持戒者シャミ・モンラム・オツゼルに會晤し、次でカワトンナムを訪ひしに、カワダルセンに就かば、教を學ぶに最上乘ならんとの諭を蒙り、去りてカワダルセンに師従しぬ。彼は又バルツェン・ドルシヨに從ひて講説を聞き、般若の深義に通達す。年四十にしてチヨルモルン地のツヘデー寺(Skyor Mo-Rin Chos-Sde)を管つて律部を顯彰す。彼は四十八歳のとき、セムバーツェンボロー(Seems-dBaJa Chen-Po Blo-Gros)に具足戒を授け、自から解脫戒經、根本毘那耶等に關する三百餘の註釋を著はす。乙亥歲彼亦無常の風を逃る能はずして享年八十七歳にして逝きぬ。彼が門下多くある中に於て、尤も有徳なる者を列記せば次の如し。

- 一、トル地のゼートンバ、  
(Dor Rje-Ston-Pa)°
- 二、サンゼ・ゴムバ、  
(Sams-Kgyas Sgom-Pa)°
- 三、ランルンバ、  
(Glan-Lun-Pa)°
- 四、チユグ人トソン、  
(Gru-Gu Ston-bSod)°
- 五、シユンブ人ツォク・ナムヂャル、  
(Yun-Phun Tshogs-Rnam-Rgyal)°



六、 シュンバ人イーチャク、

(gShuñ-Pa Ye-Grags)°

七、 ドクバ人ツォンセン、

(Dwags-Pa bRtson-Señ)°

八、 カンツェンボン

(mKhan-Chen-dPon)°

九、 ガーリ人ラーチョム、

(mNaha-Ris dGra-bCom)°

一〇、 ダクボ人トンシヨン、

(Dwags-Po Ston-gShon)°

一一、 ナル人ツェイー、

(Snor Chos-Yes)°

一二、 シクボ人セラブ・センゲ、

(Shig-Po Ces-Rab Sei-Ge)°

一三、 ニヤル人シヨンイー、

(gÑal-Ba gShon-Yes)°

一四、 ヨルバ人ダルマ・ツォンチュエイ、

(Yol-Pa Dar-Ma bRtson-JGrus)

怕克巴喇嘛とその師 乙亥歲、前記の第八輩カンツェンボンは拉薩の東南、サムイー廟の東方に當るダンサ地(Sg Dar-Sa)に來り、此處に十八年間住して修學研究に沈み、諸弟の來りて師従するもの多きを加へ、ハーリツェンチャルボ(Sha Rin-Chen Rgyal-Po)等の秀才あり。彼の後に第十二輩亦ダンサに來り、其年七十三歲に至るまでダンサ道場に留錫して、戒律の宣顯に一身を投じ、以て沙門比丘を養成せしもの多かりき。有名なるロゴンツェチャルバクバ喇嘛(元朝の怕克巴喇嘛 hGro-

mGon Chos Rgyal hPhags-Pa)を來りて彼に師従し、諸々の講説を聽きたり。

此時ボンシヨンスツォンチュイ (dBon gShon-Nu bRtsen-ljGrus) は前記第十二輩に就て出家し、具足戒を受けたり。又彼は第八輩カンツェンボンに從て戒法を學得す。又ランロ・セーチクバ (Rai-Lo She gCig-Pa) はダンサ道場に來錫し、九年間住し、法筵を開き僧伽の教化に竭す。彼の門下にはツォンチュイ・チュンチ (bTshon-bGus bBgu'i-gNas) 等出でたり。ツォンチュイ・チュンネはシヨンス・デュンチに就て比丘戒を授り、四年間ダンサに住して、解脫戒經に注解を作り、チュミク地の法輪寺に在て開講し、一切智者として知られき。その後七年にして彼は逝去せり。彼の門下よりジャシヤン・シヤキヤシヨンス (hJam hByans gShon-Nu?) 等多くの弟子出でたり。

其後ボン・チュンチ・リンツェン (dPon hByun-gNas Rin-Chen) あり。シヨンス・ゾンチュイに從て出家し、併せて具足戒を成就し、戒律に關する講説を聽きぬ。彼年五十一歳にしてダンサに來錫し、教團を設置して、法と資糧とを施與し、教法の基柱たる僧伽を養成し、五十七歳にして死す。弟子ボンゾバ (dBon bZod-Pa) は師に就て具足戒を受け、薰化を蒙りぬ。二十九歳のときダンサ地に至り、茲に講演を開き、師脉を繼承す、彼は四十九歳にして逝きぬ。ワンシユク・セラブ (dBai-Phyug Ces-Rab) は、ツォンチュイ・チュンチに就て具足戒を受け、師及ロボンタクルンバ (Seob-dPon Thag I un-Pa) より毘那耶の講説を聞き、二十歳より二十四歳に至る間法事を行ひ、四十三歳にしてダンサに至る。彼は戒律に關する古代よりの註釋に就て研究し、門弟を集めて講説す。軌範師ダルワンバ

(Dar-dBar-Ba)等の弟子を集め、法施と食施とを供して法幢を樹てぬ、年六十八歳に達するや、ダンサ道場をボンセラブ・ドルゼ (dBon Ges-Rab-Rdo Rje) に譲り、同年怛然として寂す。

ボン・セラブ・ドルゼは始めカンツェンゾバに就て出家し、ツンシユク・セラブに從て比丘戒を授かりしものなり。四十二歳のときダンサ道場に入り、四十九歳にして示寂す。此後クンガージェンチ (Kun-dGaia hByun gNas) はワンシユクセラブに就て出家し、具足戒を受けて教育せられぬ。三十歳にしてダンサ道場に入り四十六歳にして死す。

**ダンサ道場兵亂を逸る** カンツェン・セラブドルゼ (mKhan-Chen Ges-Rab Rdo-Rje) はダンサ道場を管理しありしとき、チグン地の人 (tBrig Gna Pa; 拉薩の東カルダン寺の東北地方) は兵を率ひてダンサ道場を破壊せんとせしとき、彼は祈禱力を以て敵を退散せしめて、道場を安全に保護したりとて其名嘖々たるものあり。後彼はカーシバ・ロサル (dKa-lha-bShi-Pa Blo-gSal) にダンサを譲り、七十九歳にして死す。

**支那帝の獎學** カーシバ・ロサルは、バルディ地の王ソドナム (Sbal-Ti bSod-Nams) の子にして、丙寅歲に生る。彼はカンツェンセラブ・ドルゼに就て出家し、併せて具足戒ヤホレを授かり、教師ソドナムツチム (bSod-Nams Tshul-Khrims) に従ひ、毘那耶と論部とを學ぶ。年三十二歳にして時の支那帝タイシトゥ (Tai-shi Si Tu) より彼が德行功蹟を賞せられて、ダンサの主ヤホレに封せらる其弟子の主

なるものは左の如し。

- 一、ゼーリンポツエ(宗喀巴)、  
(Rje Rin-Po-Che)°
- 二、ヂヤツアブ・リンポツエ、  
(Rgyab-Tshab Rin-Po-Che)°
- 三、チャンセム・ラーレンバ(宗喀巴の師)  
(Byan-Sems Ra Sgreñ-Ba)°
- 四、ケーチュブ・ツエーゼ、  
(mKhas-Grub Chos-Rje)°
- 五、カンツェン・ヤクバ、  
(mKhan-Chen gYag-Pa)°
- 六、ツエーゼ・ロンツェンバ、  
(Chos-Rje Ron-Chen-Pa)°
- 七、マルトン人バルダン・リンツェン、  
(mMar-Ston dPal-Ldan Rin-Chen)°
- 八、マルトン人ヂヤムツォリンツェン、  
(mMar-Ston Rgya-mTsho Rin-Chen)°
- 九、ダクボ人オツゼル・センゲ、  
(Dwags-Po Hod-Zer Sen-Ge)°
- 一〇、ジヤムヤンツェゼ・ラシー・バルダン、  
(hJam-dByañs Chos-Rje bKra-gis dPal-Ldan)°
- 一一、トクダンイーシ・ヂャルツァン、  
(Rtogs-Ldam Ye-ges Rgyal-mTshan)°
- 一二、カーシ・人ナクリン、  
(dKaSha-bShi-Pa Nags-Rin)°
- 一三、ボン・ゴンサルバ、  
(dBon dGons-gSal-Ba)°
- 一四、ボンツェチョン・ザンボ、  
(dBon Chos-Skyon bZan-Po)°

一五、ジャムカル人バルダン・ザンボ、  
(hJam-dKar-Pa dPal-Ldan Zai-Po)°

一六、ツエル・チュン・カーシ人ドンヨ・チャルツァン、  
(hTshel-Chun dKa-ha-bShi-Pa Don-Yod

Rgyal-mTshan)

一七、ロボン・ツォンチュイ・チャク、  
(Slob-dPon bRtson-ḥGrus Grags)

一八、サムタン・ペルバ、  
(bSam-gTan hPhel-Ba)

カーシ人・ローサルは六十一歳のとき、ボン・ゴンサルバに道場を傳へて隱退し、己丑歲八十四歲にて寂す。宗喀巴は彼の師カーシ地ロサルに就てバルデイ羅漢の毘那耶に關する註解の講演を聽きて、其が蘊奥に通達せり。

#### 第四節 西藏に於けるカン・ツェン・シワツォの傳系

**カンツェンシワツォ師の傳系** ラツェン・ゴンバ・ラブサルの毘那耶繼承に就て尋釋するに、佛陀より漸次傳承し、寫瓶一如にしてカンツェンシワツォ寂護に至れる事情は、已に上來敘述せるが如し。今彼ラツェン師及其以後の相承が西藏に於ては、如何に流傳せるやを説明せん。西藏系に在ては、カンツェン・シワツォより始まりて各輩に傳燈せる左の如し。

一、カンツェン・シワツォ、(寂護)  
(mKhan-Chen Gi-Ba-mTsho)°

- 二、 スヴ・ラトナ、  
(Sba Ratna)°
- 三、 マル・シャキヤムニ、  
(dMar Chakya-Mu-Ni)°
- 四、 ナムカーヅォ、  
(Nam mKha-la-mDso)°
- 五、 ヨー・ゲーチュン、  
(gYo dGe-lByun)°
- 六、 ラツェン・ゴンバ・ラブサル、  
(Bla-Chen dGons-Pa Rab-gSal)°
- 七、 バゴン人イーシ・ユンチュン、  
(Spa-Goiñ Ye-Çes gYun-Dtun)°
- 八、 チュム地の人イーシ・チャルツァン、  
(Grunms-Pa Ye-Çes Rgyal-mTshan)°
- 九、 ルーメ・ツチム・セラブ、  
(Klu-Mes Tshul-Khrims Çes-Rab)°
- 一〇、 ズイ人ドルゼ・チャル・ツァン、  
(gZus Rdo-Rje Rgyal-mTshan)°
- 一一、 ナボ人チャクバ・チャルツァン、  
(Sna-Po Grags-Pa Rgyal-mTshan)°
- 一二、 ブレ人セラブ・バル、  
(l̥Bre Çes-Rab l̥Bar)°
- 一三、 チバ人シヨンス・センゲ、  
(RtisiP-a gÇon-Nu Sen-Ge)°
- 一四、 ロトン人ドウシ・チャク、  
(Gro-Ston bDun-Rtisi Grags)°
- 一五、 チムバ人ナムカー・チャク、  
(mChims-Pa Nam-mKha-la Grags)°
- 一六、 ゼウ人チャクバ・セラブ、  
(Zelju Grags-Pa Çes-Rab)°

- 一七、チムバ人・ローザン・チャク、  
(mChims-Pa Blo-bZan Grags)°
- 一八、ロトン人クンガー・チャルツァン、  
(Gro-sTon Kun-dGaḥa Rgyal-mTshan)°
- 一九、バントン人チュブバ・セラブ、  
(Span-Ston Gru-Pa Ges-Rab)°
- 二〇、ゲンドワン・チュブ、(宗喀巴の弟子)  
(dGe-luDun-Grub)
- 二一、ドゥルジン・ローレーベバ、  
(lDuḥ-luḍsin Bro-Gros Sbas-Pa)°
- 二二、パンツェン・クンガーデーレク、  
(Pan-Chen Kun-dGaḥa bDe-Legs)°
- 二三、ゲンドワン・チャムツォ、(達頼第二世)  
(dGe-luDun Rgyal-mTsho)°
- 二四、シャルダン人ゲーレクバルザン、  
(Gal-Sdan dGe-Legs dPal-bZan)°
- 二五、ソドナム・チャムツォ、(達頼第三世)  
(bSod-Nams-Rgyal-mTsho)°
- 二六、パンツェン・ローザンツェデ・チャルツァン (班禪第一世) (Pan-Chen Blo-bZan Chos-Kyi Rgyal-mTshan)°
- 二七、ドルゼ・ジンバ・コンチョク・チャル・シヤン (Rdo-Rje bDzin-Pa dKon-mChog Rgyal-mTshan)
- 二八、ゼツンタムチャ・ツェンバ・ローザンイーシ (班禪第三世) (Rje-bTsun Thams-Cad mKhyen-Pa Blo-bZan Ye-Ges)°

著者の授戒系

此喇嘛教史の原著者 ドゥルワ・ジンバ・イーシ・チャル・シヤン (lDuḥ-Ba lDzin-Pa Ye

(Ges Rgyal-mi Tshan) は上記第二十八輩ゼツン・ローザンイーシに沙彌戒ゲイメルを授からんことを乞ひしに、ローザンイーシは先づローザン・ナムヂャル (Blo-bZan Rnam-Rgyal) に具足戒を授け、然後ローザン・ナムヂャルをして此原著者に具足戒を授けしむ、著者は遂にその志願を成就するを得たり。

## 第五節 班禪釋迦室利の傳系

班禪釋迦室利の傳系 班禪傳系は、奈如にして繼承し來りし歟を列舉せば左の如し。

- 一、佛陀、  
(Sais Rgyas)°
- 二、舍利弗、  
(Cha-Riji Bu)°
- 三、子の羅睺羅、  
(Sras-Sgra gCan-ji Dsin)°  
(Bram-je Sgra-gCan ji Dsin)
- 四、婆羅門羅睺羅、  
(Klu-Sgrub)
- 五、龍樹、  
(Yon-Tan Blo-Gros)
- 六、德慧、  
(Ratna Mitra)
- 七、寶友、  
(Dharma Pha-La.)
- 八、護法、  
(Gunaa Mati.)
- 九、グナマデイ、(德慧)



10、ツエーヂ・ツェンバ

(Chos-Kgi Hbreh-Ba)

11、濕婆のヂェンチー・ゼーバ

(Qi Bala lByun-gNas Shas-Pa)

12、班禪釋迦室利(迦濕彌爾人)

(Chakya-Chin)

# 班禪の幼時

班禪シャキャシュリーは西方屬賓國チタン州(Khri-Tsam)に生る。父はブラ・ワランヤ

ブ・ジャムツォ(Pra Wa-Rain-Yab Rgya-mTsho)の長男にして、名をサムヤ(Sam-Ya)と云ひ、母を

スプバガ(Su-Bha-Ga)と云ふ。丁未歳、彼は父母の間に生れぬ。父母は此愛兒をゾアシユブ・ダラン

(Dsa-Gwa Dha-Rain)と命名せり。此少年は天性穎悟、法を學ぶに伶俐にして、幼より音樂、天文、

技藝、醫術、論理の五明に通達せるのみならず、内教を學ぶ頗る造詣するところあり。當時國內に

多くの智者ありと雖、その才能學藝や能く彼に及ぶものあらず。此を以て國王は彼を推賞して、國

中に於ける總學者中の碩果として月桂冠を與へぬ。彼始め年十歳に達して、優婆塞(Upasaka)と

なりて淨行を修す。己巳歳に二十三歳にして出家して、佛陀の淨行者の一人となり、一切法の根本

と稱せらる毘那耶に依り沙彌戒を持し、品行方純、眼果崇果にして、晝夜法の十行を思惟し、研鑽

熱心臻らざるなかりき。彼は淨行の間は如何なる財寶も手に觸れず、損益効果に關する善惡如何を惹

起するあらんも、敢て其を意に介せず、専心舊直に淨戒に注意し、菩提心及び滅と不滅との兩端二

見を離捨せる中道見(dBa-Mahī lta-Ba)との二法に依て正道に達し、以て四誓願を起しぬ。修養完

就せる彼は、迦濕彌爾の東<sup>ウイ</sup>ハ、西藏衛地に來り、佛教宣布を企て、藏地の宗教弊風を刷新せんとす。

衛地(中藏)に於て大班抵達シワ・チンチ・ペバ・ヤンニャン (dByanis-Sñan) ローラー・グー・グー (Blo-Gros Shas-Pa) 等の碩德に邂逅し、更に經律論三部を精研して、其が深奥を窮む。丙子歲三十歲に達せしとき、長老大持戒者シャンタ・カラ・グプタ (Santā kara Gupta) シワ・チンチ・ペバの長老となり、教師ダーシバ (Dala Qi-Ba) 及びダーナカラ (Dala-Na-Ka-Ra) は秘密尋問者となり、他十六人の僧伽は開口の任を務め、總僧伽十八人の間に於て、具足戒を受けて比丘の宣誓式を擧げぬ。長老等の前に於て二百五十三戒を受け、眞摯に之を守る法眼の如くにせり。而して彼は宗教的事業に盡さんことを欲し、布施行に賴て生活修業し、全然身命を捧げて、餘を顧るに違あらざりき。彼が戒律を受けて長老教師等は、彼の淨行の高潔にして、道行肅清なる、全く乞食生活を營めるを稱譽し、彼の名を迦濕彌爾バンツェン・ソドニョムバ・シェンポ (Pan-Chen bSod-Sñoms-Pa Chen-Po) と命ぜしなり。

**班禪の教義** 持戒淨行の効果は、一切諸佛の嘆するところにして、亦之れ物的本體と、現象との內在從屬的因果律を擺脫する法源なりと説くが如く、彼班禪は戒法を圓滿に體得せる能力に依り、諸佛菩提を觀想するを得たり。加之諸善神は彼を擁護し、彼を供養尊敬せること思惟の及ぶところに非ず。四天王は影の形に隨ふが如く、夜晝常に守り、教法傳布は法の如く盡瘁し、かゝるものを歡喜調する多聞天の八大將の隨一たる。バンチカー (Tānā-Chen) は特に尊重敬禮せり。

迦濕彌爾國に於て佛敎信仰に篤き某豪富は彼を崇拜し、永く施主となりて法資を貢し尊敬せらるるなし。其他多くの慈善家出で、彼の淨行高潔なるに服し、宗教的傳道事業を助けぬ。彼は是等善男善女の布施補助に依て、大乘佛敎弘通に不尠便宜を得たり。

曾て摩揭陀國の某王は、常に錫崙島に住せる羅漢を供養しつゝありき。一日王の使臣は遠方より法糧を運び來りしに、羅漢は使臣に謂て曰く、汝の國中に一沙門あり。世に未だ知られずして隱遁す、然ども彼の沙門や、如來の敎法を宣揚し、救済の路に忠實なる大菩薩なり。其名をシャキャシリと云ふ。惟ふに汝等若し彼の沙門を尊敬するならば、蓋し其功德測るべからざるものあらんと。シャキャシリ<sup>Shakya Sili</sup>の從者は波羅漢を訪ふべく來りぬ。羅漢從者に尋ぬるに、その後國王より何等歟の命令ありしや否、我は曩きに王の使臣に告ぐるに、汝の師に布施の善行を儆すべきを勸めぬ。知らず何等の消息ありしやと、羅漢が此く望を屬し心中敬服せしに違はずチョブの翻譯家チャムバ・バ<sup>Cham Ba</sup> (Kbro-Phu Lo-Tsha-Ba Byans-Ba dBal) 鷄足山の隱者ヨナ・シンチ<sup>Yona Shintchi</sup> (Ayo-Na Shin-Skyon) は皆彼が高徳を稱せざるはなし。

梵藏兩文の書翰 聰慧卓犖の彼は、其後印度の西方迦濕彌爾國に到り、千餘人の僧伽に如來の正法を説きて傳道光揚に盡献し、暫らく同國に滯錫せり。翻譯家チョブは信書並びに方物を贈りて西藏に傳道せんことを乞ひぬ。書は梵語と藏文とにて認めし各一函より成れり、贈品は喀木地<sup>Kamti</sup> ミニヤガ

地方にて織れる三衣の二重と綢緞製の天蓋となり。チヨブ翻譯家の捧せし信書の文に曰く。

釋迦の教法に於てシャキヤの子として生れ、シャキヤの御名を有し、最上無垢の五智誓を堅持する慈愛の班禪聖者<sup>バンゼン</sup>よ吾等に完全なる守護を與へよ。曾てより有名なる汝の御名を聞きしと雖、信仰を疑懐する者ありて相互に紛擾せり。されど善男善女等は雪山の裡より祈願合掌して全身を捧げて誓願す。摩揭陁國等の階級的君主等は罪なる哉、大勢の軍兵を提げて蔦杖那、チパール、迦濕彌爾を擊滅して、人類の悲惨を釀成し顛倒の妄見滔々として天地を蔽ひ、暴行紊亂して社會を攪亂す。佛教亦その迫害を蒙り、教命累卵よりも危し。凡て人類中に於ける偉大なる人よ。斯る時勢に際して玉趾を移して巡錫せんことを。別異の新らしき思想を賦與する汝聖者よ。獨り決定心を以て、如何なる國にも發せざりし未曾有の國難を特に裁斷せよ。適意の國を去りて長き旅途に上り、困難なる進みをなせ。遲緩なる路程なるも、全く希望あるべくなせ。釋迦の子なる汝は、此意義目的を成せん爲め、傳導事業を實行するとき、社會人民の批評は如何にあるとも慈父のその兒に與ふる教訓が、如何に嚴格峻酷なりとて拋棄せらるゝことあるとも、开は毫末も意に介在するを要せざるなり。嗚呼汝聖者よ、其を救済すべき何等歟の慈悲の方便を、吾等に教へ説かんことを願ふと。

時代の非運なる釋教の衰頹を嘆ち、其が恢復策を講せんと企圖しつつありしシャキヤシユリーは、チ

ヨブ・ロツァワの招聘書を受理してより、一層自己の精神を激感し、その茲に熱誠なる意志と、慈愛心とに馳られ、奮然立つて彼等の請に應じ、その目的遂行に従事せんとす。而して彼が將に旅裝を整へて出立せんとするや、彼が多くの門弟は師の離別を惜しみ、印度に止りて他國の巡錫教化を廢止せんことを乞ひぬ。然ども彼が宗教傳導に熱誠にして、佛光宣揚に眞摯なる不撓不倦の精神は如何ぞ彼等門下の諫言哀願に自己の意志を枉ぐべき、遂に印度ベトウラヤ市を立ちて西藏に來れり。

後藏チユミク地(Chu Mis)に到着せしとき、チヨブ・ロツァワは多くの沙門を率ひ盛大の贈品を捧げて彼を歡迎せり。

## 第六節

班禪師バンセンの來藏とその分派

班禪と布薩會　甲子歲チヨブ・ロツアワは沙門八百餘名を集會して安居を開きぬ。班禪シヤキャシユリーは此安居の道場に臨みて八千般若經、解脫戒經等を講演し、毘那耶の實行を勸説せり。此時南方チャクバ地の人チヤンチュヰバル(Blag-Pa Hyans-Chub-dPal)等に具足戒を授く。

其後班禪は、ナルヂ・メモツセル地(Snar-Gi Smas-Mo-Cher)に巡化して般若皆空論を説きぬ。乙丑歲安居を開き布薩會を實修す。安居終りて多くの僧伽の請に應じ、ニヤント・チュミク・リンモ地(Nyañ-Stod Chu-Mig Rin-Mo)に到りて、ブト・ソントハン・シエンズ(dBu-Ma Rin-Chen Jhrei-Ba)

等を教<sup>①</sup>。シャ<sup>ン</sup>・チャ<sup>ゴン</sup>地 (Sha-lu Rgyan-Gon) に巡錫し、ネモ<sup>ワ</sup>人<sup>ドルゼ・ゾルワ</sup> (Sne-Mo-Ra Rdo-Rje dpal-Ba) 等に具足戒を授く。その後中藏拉薩に來りて弘通す。次でスリン<sup>ボ</sup>・リン<sup>地</sup> (Srin-po Rin) に至り丙寅歲安居を開き、五部彌勒經<sup>チヤム</sup> (Byams-Chos Sde-Sia<sup>ガ</sup>) 中論<sup>dBu-Ma</sup> (六) 集道を講し、説明妙緻を極め論理引證明晰に亘る。布薩會を開催せし後、ニヤ<sup>ル</sup>地<sup>(gnyu)</sup> に巡錫し、ツァン<sup>ボツェ</sup>地 (Zais-po Che) の多くの比丘沙門を集めて大乘妙法を宣し、菩提道品を教授す。此講演完りてサムエー地に到る。此にポ<sup>チヤン</sup>・シ<sup>ワ</sup>オ<sup>ッ</sup>ド<sup>ン</sup> (Pho-bran Shi-Ba Hlod) なる淨行者に說法す。此時チャマ地のボン<sup>トン</sup>・リン<sup>ボセ</sup> (Rgya-Ma dBon-Ston Rin-po-Che) の來訪あり、而して其の招聘に應じて、チャ<sup>マ</sup>・リン<sup>ツェン</sup>・ガ<sup>ン</sup>寺 (Rgya-Ma Rin-Chen Sgan) に化回す。ボン<sup>トン</sup>・リン<sup>ボツェ</sup>の史傳に就ては錫篇羅漢の傳説あり。曰く汝は未來に於ける兜率天の佛たるべしとの豫言の下に蓮華一莖を授けたりと。傳説の真相奈何を尋釋するに遑あらざるも、彼は當時に在りては、傳道事業に盡瘁し、彼此相輔して光明を放ちしなり。

其後ソ<sup>ル</sup>ナ<sup>グ</sup>・タ<sup>ン</sup>ボ<sup>ツ</sup>地 (Sol-Nag Thai-Po-Che) に下向して諸法を開演す。殊に世尊が説き給ひし教法が、滅後如何に經過し、奈來様に傳布せし歟の佛教歴史に就て研究しぬ。丁卯の歲、及び戊辰の歲に亘りて二回の安居を開き、古代佛教史を勘校し、その誤謬異同を訂整彰顯す。此偉業を完了して、西藏の北部地方、ラ<sup>ツ</sup>ヘ<sup>ン</sup>地 (Ra-Sgrein) に於てプロ<sup>ム</sup>ト<sup>ン</sup>バ<sup>喇嘛</sup>の建勅に係かるカー<sup>ダ</sup>

ムバ派(Bkalia)gDams Baラゼン寺に巡錫し、此に滯留して専心に傳道しぬ。(譯者云ラツェン寺は西曆十一世紀の建築に係る)

薩迦派 その後中藏(衛州)<sup>ウイ</sup>のシャル・チャンゴン寺(Sha-Lu Rgyan-Gon)後藏扎什倫布の西南數里に)

來錫し、薩迦派の薩迦班禪<sup>サチャバンゼン</sup>(Sa-Skya Pan-Chen)に具足戒を授けて多くの講説をなせり。又中藏に還

錫し、チャマ・リンツェンガン寺(Rgya-Ma Rin-Chen-Gan)に於て教育し、己巳の歲同寺に於て安居を開きぬ。安居完終して後、再び後藏に還り、扎什倫布の北部、シャン地のシャンル・グドン寺

(Gans-Lu Gu-gDon)に於て多くの歸依者に比丘戒の宣誓を結授しぬ。庚午歲、安居を開き以て布薩會の結界を結びぬ。又同地の諸寺に巡演して求道の縉紳、一般信者に對し、その信念の高低優劣の心度に應じ、對機説法をなし、特に毘那耶の規定に従て道德的行爲を修すべきを懇篤に誨へぬ。辛未の歲、薩迦地に於て安居し後藏各地を巡化す。

その後チヨブ寺(Kro-Phu)の大彌勒佛像の建立を速かに竣工せんと欲して、其が監督をチヨプロツアワに命じぬ。彼は師より資財材料器具を受けて佛像の製作を急ぎ、辛申歲その製作の完成を告げぬ、佛像甚だ巧妙を極む。同年六月三日より同十三日に至る間、開眼供養式を舉行せり。同年同寺に於て安居を開きしに、比丘沙門の隨喜參禪するもの群をなし、彼等信者の請に依て、經と曼特羅とを演説しぬ。

西藏佛教の隆盛 迦濕彌羅<sup>パンセン</sup>班禪シヤキャシユリは西藏に來りし以來、中藏後藏の各地に巡化し、

専ら佛教の宣揚に努力し、内寶聖法の毘那耶の擴張宣布に全力を竭し、行住坐臥常に國を離れずその實踐道德的修養の方法を完成して、宗教傳道事業を隆盛ならしめき。今や藏地の佛教は稍整頓隆興の機運に際し、年に月に教勢益隆盡ならんとするを洞察して、自己の歇せし聖職が、聊か其目的に達せしを以て、去りて故郷迦濕彌羅に回らんと決しぬ。彼が門下及多くの信者は、彼が西藏を辭せんとするを視て、強て留錫を懇請せしかど、彼は當時印度に於ける佛教は衰頽廢微の時勢に際しければ、其が刷振興隆を謀るは刻下の急務にして、是れ亦我天職なり、敢て西藏に留錫する能はずとて、容易に聽許すべくもあらざりき。此に於て彼の直弟チャンチュフ・バルフ(Brain-Chub dBal-Ba)及びドルゼ・ブルフ(Rdo-Rje dBal-Ba)の二人は、師に扈從して印度に到らんと乞ひけるに、彼は二人を訓誡して曰く、印度に行くよりも西藏に止まる方其の目的の大なるもあらん。即ち毘那耶の示す規條を完修し、相互に比丘教團の四部衆の各々をして分離せざらしめ、以て布薩會等の三源の實修を懈怠なからしむべく教導するは、正に是れ教團の必要なる條件なれば、是が總ての根底たる具足戒會の宣誓を破壊せざらしめよ。毘那耶が示す各の章程に従ひ、正格に法義を遵奉する總ての僧伽の部の何れをも増大ならしめよと、懇々丁重に訓諭するところありて、蹶然袖を拂ひて歸國の途に上りぬ。歸路ガーリブラン地(mNaha-Ris Pu-Rain)に至りて、同地のチュモチャロ寺(Chu-Mo



Bya-Lo)に於て安居せり。次でラダク地(La Dvags)を経て、郷里迦濕彌羅に歸りぬ、彼や故國に歸りては直に傳道に奔り、同國の佛數稍衰微に傾きつゝあるを挽回せんとして、晩年の老體を提げて傳道事業に盡瘁し、教ゆるに常に經と曼特羅との教理を併説し、以て斜陽西に落ちんとする教勢に一掉尾を與へぬ。斯くて乙酉の歲此の偉人宗教家は九十九歳の長命を得て入寂せり。

**班禪系の四派** 師班禪シャキャ・シユリの西藏を去りし後、其直弟二人は、師命を畏みて毘那耶の條規を遵守し、沙門教團の柱石棟梁たらんとして、聖教戒條を如法に研磨し、教團の各部を増大擴張し、一筵上に於て、具足戒を受けて宣誓を表する比丘衆を益々擴大隆盛ならしめき。二人が教團刷新に盡せる効果の極めて顯著なるものありしかば、四部衆の各派よりはチョ・オ・タンチクバ(Jo-Bo Stan-g-Cig-Pa)と稱せられて名聲噴々たり。四部衆 Tshogs-Sde bShi の教團各派は左の如し。

- 一、ツォク・ゲンドゥン・ガンバ、(僧伽衆滿派) (Tshogs dGe-ljDun Sgai-Pa)°
- 二、ツォク・ツェンモバ、(大衆派) (Tshogs Cien-Mo-Ba)°
- 三、ツォク・ツェジンバ、(鳥池衆派) (Tshogs Bye Rdsins-pa)°
- 四、ツェルン・ツォクバ、(法令衆派) (Chos-Lun Tshogs-Pa)°

宗喀巴は亦班禪シャキャシユリの繼傳具足戒を大衆派の長老ツチム・リンツェン(Tshul-Khrims Rin-Chen)より傳系せしなり。

班禪以下の毘那耶の傳燈 班禪釋迦室利以下、其の毘那耶の傳系を擧ぐれば左の如し。

一 迦濕彌爾班禪<sup>バンゼン</sup>シヤキャシユリー

二、 チャンチュブ・バル、 (Byan-Chub dPal)°

三、 デーワ・バル、 (bDe-Ba dPal)°

四、 カンツェン・チャクバ・シヨンヌ、 (mKhan-Chen Grags-Pa gShon-Nu)°

五、 ブトン・リンボツェ、 (Bu-Ston Rin-Po-Che)°

六、 チャクバ・チャルツァン、 (Grage-Pa Rgyal-mTshan)°

七、 セルチュエン・ローレー、 (Ser-ljDyui Blo-Gros)°

八、 イーシ・チャクバ、 (Ye-fes Grags-pa)°

九、 ローレー・レクザン、 (Blo Gros Regs bZan)°

一〇、 バンツェン・ダムツェ・ヤルヘル、 (Pan-Chen Dam-Chos Yar-lPhel)°

二、 タムチャツェンバ・ロザンツェチ・チャルツァン、 (Thams-Cad mKhyen-Pa Blo-bZan Chos-  
Kyi Rgyal-mTshan)°

三、 ドルゼ・ジンバ・コンチョク・チャルツァン、 (Rdo-Kje-ljDzin-Pa dKon-mChog Rgyal-mTshan)

三、 ゼツン・タムチャ・ツェンバ・ロザンイーシ、 (Rje-bTsun Thams-Cad mKhen-Pa Blo-bZan

Ye-Yes)°

此の史の原著は、ロザンナムチャル・バルザンポに就て具足成の繼承を傳系す。

## 第七節 班禪系の毘那耶の傳布

**班禪と其弟子** 班禪傳系の毘那耶は、其後如何様に宣傳發達せし歟の經路を尋釋せん。班禪シヤキヤシユリーの精神的親子とも稱せらる弟子ロツアワ・チャムババル (Lo-Tsha-Ba Bryans-Pa dPal) は、チヨブ地に於て僧伽教團を設立し、師の面授口訣たる毘那耶を講授して、眞律宗の風を宣揚す。チヨブ教團の有徳長老等は、班禪系の律風に化せられて、シヤキヤシユリー派の毘那耶を繼承するに至り、嚴肅なる道徳的淨行の律風顯揚に甚だ昂めたり。就中尤も優秀にして頭角を顯はせしものは、即ちブトリンボツエ喇嘛是れなり。

**ブトリンボツエ喇嘛と著書** ブトン・リンボツエは天性慧悟、博覺強記にして教團中の碩徳龍象たり。彼が著書は西藏佛教學者中尤も正確なるものとして世に知らる。彼は四分律の註疏を一に集めし、戒根經及び其義釋を研鑽し、造詣頗る深し。彼が著書多き中、尤も世に知れつゝあるもの二三を左に列舉せん。

一、戒律寶美莊嚴 (全戒律の註釋)

(JuDul-Ba Rin-Po Chelji mDses Kgyan)

二、戒律海藏甚明記、(戒經義の註釋)

三、百衣全釋明儀軌、

四、戒律修習淨鬘發起俗利益儀軌、

五、日時知感訣、

六、比丘尼分別義作明新藏、

七、戒經釋訣根本支説、

八、戒經悟稱讚大十萬説、

九、増信歡喜書、(釋尊傳並に戒法より纂集す)(L'ad-Cin dGaṇa-Pa bSkyed-Byed)°

(ḥDul-Ba Rgya-mṬsho Shin-Po Rab-Tu gSar-Bar Byed-Pa)°

(Ras bRgya-Rtsa gCig-Gi Rnam-Par bCad-Pa Cho-Gaṇi gSar-Byed)°

(ḥDul-Bahi Lag-Le Gyi Dsi-Ma-Med-Pahi ḷhen-Ba Shar-Byun Khyim-Pa-La Pham-gDags-Paṇi Cho-Ga)°

(Dus-Goḷi dBan-Thabs)°

(dGe-Slon-Maṇi Rnam-Par ḥByed-Paṇi Doṇi gSat-Bar-Byed-Pa Shin-Po g-ar Pa)°

(ḥDul-Ba mDoḷi-bCad-Thabs-Kyi Yan-Lag Glen-gShi)°

(Rtogs-bKjod bSton-Pa Shes-Bya Ba-Glen-ḷBum Chen-Po)°

其他に佛教の起りし一般の情況と、印度西藏に佛教の傳布せし狀態等に就て多くの著書あるも之を略す。

班禪釋迦室利<sup>の</sup>布教傳道に盡瘁せし効果は、實に著しき現象を呈し、雪山國に於て僧伽敎團の勃興せることの頗る多かりし事實は上來述べたるが如し。然ども今尙其遺業を填綴して、彼が宗教家として、偉人たるの功績を讀へんとす。彼自から衛地<sup>ウイ</sup>に來錫せしとき、チユシヤル・ロクマ寺<sup>(Cul Sprog-Ma)</sup>に留り、如法修道者十一人に比丘戒を授け、其他中藏、後藏の兩地の多くの寺院敎團に於て、遇ひ難き聖法に遭遇せし隨喜鑽仰の沙門等に具足戒會を設けて、彼等同行の志願を充たし、淨戒を受けし比丘は、各々に其系嗣に傳へ、斯くして幾多の僧伽の部を増生し、律風盛に吹いて、當時に於ける西藏敎の汚濁を洗滌したり。而して班禪の律系と其傳規とを遵守保持せる敎團は、先きに叙上せし四大寺派にして、夥多の敎團中尤も正確に班禪の宗風を繼承せるものとして有名なり。

林眠衆派の緣起 四大寺派の起りし事情を尋繹せんに、先づ大衆派は一名林眠衆派 (Tshog<sup>ツ</sup>-Tshat<sup>ツ</sup>-  
ngi<sup>ツ</sup>-n<sup>ツ</sup>)とも稱す。其故如何と云ふに、始め班禪より具足戒を受けし叙上の十二人中、ツァン・ソー  
人ツァム・セー (gTsan-S<sup>ツ</sup>-o-Ba Tshul-Khrims mDse<sup>ツ</sup>)なるもの班禪の印度に去りし後、九年間班禪の  
傳系を護持し、恬淡隱遁の淨行者を集め、一筵上に於て具足戒會の宣誓を守る諸比丘の長老となり

て、僧伽の部衆を保護せり。次で子モツオターバ人長老ドルゼ・バルワ (Sne-Mo-in-Tsho mTha-lu-Ba Rdo-Kje dPal-Ba) シーチャク人チャンチュブ・バルワ (Lho-Brag-Pa Pyan-Chub dPal-Ba) は夥多の沙門に具足戒を執行して教團の部衆を守りぬ。而して班禪の印度に去らんとせしとき、班禪に隨從して印度に遊學せんことを乞ひしも、西藏に止りて衆生教化を掌ること最上の効果あるなれど訓誡せられ、班禪より毘那耶を聴き、同時に具足戒を施行するには比丘の數に於て是非共四人なかるべからず、其中一人をも欠かば、斯會を執行するの效果消滅すべしとの師の訓言を遵守して、教團の隆盛に勉めたり。ツチムゼー逝去の後、長老ドルゼ・バル比丘衆團の長老となり、チャンチュブ・バルは其部衆の教師となり、相互に教團の教育に盡瘁すること前後二十年の久しきに及び、一に僧伽部衆の動搖せざらんことを希望して、律宗の風規を嚴格に守護したり。當時ジョタン地 (Jo-Bran) に戒律を標榜して沙門の教育を施せる教團即ち道場は只此の一教團のみにして佛教社會に於ける木鐸となりて西藏を風靡し、四方より沙門比丘の參禪來集する、猶叢林深園に異ならざるの盛況を呈しぬ。此を以て此教團部衆を名けて、ジョタン地の林眼衆派或大衆派と稱するに至れり。

大衆派の最初の長老は、ドルゼ・バルワの直弟ザンゼ・バルワより始まりて、オツゼル・バルワ (Hod-Zer dPal Ba)、ヤクデブ人サンゼ・リンツェン (gYag-Sde-Phu Sams-Rgyas Rin-Chen) 等次第に長老となりて大衆派を繼承せり。而して改革者宗喀巴は亦大衆派の長老ツチム・リンツェン (Tshul Khri-

ms Rin-Chen)に就て具足戒の宣誓を傳系せり。

### 鳥池衆派と其傳系

他の三大衆派の分派せし事情は、長老ドルゼ・バルワの直弟子モワ人サンゼ・バルワ (Sains-Rgyas dBal-Ba) は、部衆の長老となること三十七年に及ぶ。而して彼が始めて教鞭せしより四年目に至りて、シユラボ人長老コンチヨク・チャルツァン (gShu-Sgra-Po dKon-mChog Rgyal-mTshan) なる者大衆派より分離して、別に鳥池衆派なる一派を起しぬ。鳥池派の開基コンチヨク・チャルツァンは・創立開宗以來一意専心に教團の基礎擴張を謀り、自派獨特の宗風を顯揚する事、十年の星霜を経ぬ。ヤールン人長老トゥクゼ・バルワ (Thugs-Rje dBal-Ba) ツァンタン人長老ダルマ・バルザン (bTsan-Than Dar-Ma Par-bZan) 等は各傳燈相承して十三代に至りて、長老セラブ・ゴンボ (Ges-Rab mGon-Po) に至る。彼はタムチャ・ツェンバの具足戒を學びぬ。世に是をジヨタン・セラブ・ゴンボと稱す。

**法令衆派** 法令衆派の長老系は、ソーチャク人チャンチュブ・バルワと・子モ・マクラム人ソドナム・トブ (Sñe-Mo dMag-lam-Ba bSod-'ams Stobs) ヤクデブ人デバ・バルワ (iDe-Ba dPal-Ba) 等にして彼等は次第繼承して法令衆派の法幢を翻へすに至りぬ。

### 僧伽滿衆派

僧伽滿衆派の最初の長老は、ナルタン人ワンシユク・チャクバ (Snar-Than-Pa dRan-Phyug Grags-Pa) なり。彼は甥のチュゴ人シヨンス・チャンチュブ (Chu-Sgo-Ba gShon-Nu Byams-Chub)

に傳へ、次でタクデワ・ドゥルツァ人チャンチュブザンボ (Stog bDe-Ba hDul-Tshad Byans-Chub bZ-añ-Po) 等の長老となりて、次第傳系して僧伽滿衆派の法幢を翻へし、佛敎新勃興の源泉をなしぬ。

(以下嗣出)